
王様に召喚されました

くいな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

召喚される

運命を信じていないと言ったら嘘になる。

告白されることは多々あったが、全部断ってきた。

何故かこの人ではないと本能が告げ続けているから…。

好みの男性が現れないのも運命の人じゃないからと言いつけてきた。

それは突然起こった。

「…にや？」

え！？

にやって何！？

私の名前は四之宮凜。今しがたベットに入り、就寝しようとしていたはずだ。

だが、突如私の下に変な魔方陣みたいな光の線が現れ、今私はどういふ訳が大勢の巨人に囲まれている。

「さすがウィルフレッド様！異界から運命人を召喚するなんて！」

綺麗な女の人に絶賛された男の巨人は、西洋貴族のような格好をしており、黒い髪に青い目で、今まで診てきた男のなかで一番の美形であった。

何が起きているのだろうか？

ここはどこだろうか？

そもそもここは現実なのだろうか？

「にゃっ!？」

そういえば猫みたいな声しかでない。よくよく見てみると手は黒い毛で覆われている。そして極めつけは視界の端に写る黒く長い尻尾。

もしかして…。

「にゃああああ!？」

『猫になっちゃったああああ!？』

四足立ち上がり、その場をぐるぐる回ってなんとか自分の姿を確認しようとするが、やはり黒い尻尾と黒い背中が見える。

ぴかぴかの床を見ればそこに写るのは黒猫。それ以外に自分の姿が見つかるともなく、呆然と床を見つめる。

それは紛れもなく今の自分の姿。

その時、扉が開き、男が息を切らしながら入ってきた。

そのまま美形西洋貴族のもとまで走り寄り、耳打ちする。

「…そいつを部屋に通して色々説明しとけ」

召喚される(後書き)

短っ!?

不安と強引な優しさ

連れてこられた部屋の内装はとても豪華で、本当に西洋貴族の家ではないかと思った。

「お名前をお聞かせ願いたいのですが…。生憎私では猫の言葉を理解することはできませんので、お名前がわかるまで姫様と呼ばせていただきます」

そう言っつてニッコリ笑うアラーナ。

「まず、姫様がこの世界にやってきた経緯とこの世界のことを説明いたします」

混乱する私を置いてどんどん話が進んでいく。

ああ、夢なら早く覚めてくれ。

「姫様はこのフォンテーン王国の王、ウィルフレッド・シルビス・フォンテーン様の運命の人としてウィルフレッド様に召喚されたのでございます」

アラーナが言うには、この世界は20歳になると運命人と呼ばれる運命の人を召喚し、結婚するのだそうだ。運命人は、同じ世界の人が多いのだが、稀に異界から召喚されることがあるらしい。私も異界から召喚された人の一人らしい。

それにしても…、西洋貴族みたいとは思ったが、まさか王様とは…。

「使用した魔方陣には言語の共有と運命人との魔力の共有、そして

異界から召喚されてまだ体が世界に馴染んでない運命人のために馴染みやすい体に変換させる術が組み込まれているのです。姫様は異界からの召喚で体がこの世界に馴染んでいらつしやらないので、体に負担が掛かりにくい動物に体を変換されているのです」

動物は、人間の姿より体力を使わず、尚且つ馴染むのが早い。そういうモノなのだそうだ。

それからもこの世界について教え込まれた。

例えば、この世界では瞳の色が女は金色、男は水色に変わるそうだ。髪の色赤だったり、青だったり、白だったり様々だが、これだけは共通らしい。

そして、この世界には魔術と言うものがあるらしい。持っている魔力によって多少寿命が変わるらしい。

ちなみにこの世界にいる人、召喚された人も含めて平均寿命は5000年から10000年という長寿すぎる長寿。容姿は20代から老けることはないらしく、まさに都合のいい世界である。

美形西洋貴族はウィルフレッドというらしく、この国の王なのだそうだ。若くして即位し、歴代のどの王よりも優秀と言われているらしい。

そんな凄い人に運命の人とされて召喚された私。それは必然的に、王様に嫁ぐことを表している。

どうしようお母さん、夢じゃなかったら私王様のお嫁さんだよ…。

日の沈みかけた頃、アラナーは疲れているだろうと一人にしてくれた。窓辺の椅子に飛び乗り、外を眺める。

城はとてつもなく広く、とても高い。自分が猫だと言うことを除いても、本当にでかいのはわかる。

『きれい…』

外はひたすら城下町が広がっており、灯り始めた街灯と家の明かりが何とも言えない景色を作り出している。

相変わらず猫の鳴き声しかでないが、我慢するしかない。聞けば元の姿に戻るの最低でも三ヶ月かかるらしい。

帰ることは皆無。一度来たら一生ここで過ごすしかないと言われた。

必死で涙を堪える。

町を眺め、もう会うことの無い家族を思い浮かべた。

どれくらいそうしていたのだろうか、いつの間にか日はすっかり沈んでしまい、夜特有の肌寒さが体温を奪っていく。

「寝ないのか？」

いきなり声が後ろから聞こえてきて、びくつと体が跳ねた。

後ろに振り返って見たのは、黒髪に碧眼で超絶美形。ウィルフレッドであった。

思い耽りすぎて、彼が部屋に入ってきたのに気づかなかったらしい。

「風邪をひくぞ」

そう言って窓を閉められる。

ウィルフレッドはそのままこちらを向き、しゃがんで私と視線を合わせる。

「泣いて…いるのか…？」

勢い良く振り返った拍子に涙がこぼれたようだ。

『あ、あれ？』

こぼれたことに気づかなかった。前足で急いで自分の涙を拭う。

『っわあ！？』

いきなり脇の下に手を挿し込まれ、浮遊感に襲われたと思ったら、いつの間にかウィルフレッドとベットに寝転んでいた。

「お前、名は…？」

ウィルフレッドが私の目元のこぼれそうな涙を拭う。

そういえば名乗ってなかった。

私は猫の言葉しかしゃべれないから無理だと思ったが、アラリーナが運命の人には通じると言っていたのを思い出す。

『四之宮凜…です』

「…ウィルフレッド。ウィルでいい」

そう言って、私の体を撫で始める。

その手のひらの温もりが気持ちよくて、だんだん眠気が襲ってくる。

「寝ていい」

寝ていいと言われると、もう意識にしがみつく理性はなくなる。私は意識を闇に落とした。

起きたときには自分の部屋の天井が見えることを祈って…。

朝起きるとそこには美形

わー、これどういう状況？

夢であってほしいという願望は見事に打ち砕かれ、現在私は美形で視界をいっぱいにしております。

体は美形に抱き枕のごとく抱きかかえられ、身動きがとれない。

『どっしょっしょっ…』

相変わらずにやーしか言わない自分。普通にしゃべれるようになるまで最低三ヶ月。

『はあ…』

思わずため息が出る。

とりあえず、この状況から脱しないと死ぬ。恥ずかしすぎて。

起こさないように身を擦ったりもがいたりしたが、ウィルフレッドの腕はびくともしない。

『っ、疲れた』

朝から何故こんなにも疲れなくてはいけないのだろうか。

起こそうと猫パンチを食らわすが、起きる気配がない。

仕方が無いのでウィルフレッドを見つめてみる。

『まつげ長っ！本当に美形だなあ』

そういえば案外優しくかったなあ……。と昨日のことを思い出す。

最初は無口で怖い人だと思っていたが、そうでもなく、涙の止まらない私を優しく撫でて添い寝してくれた。

そこまで思い出して顔を熱くする。

『恥ずかしい……』

なでなでされて抱き枕にされながら一緒に寝るなど……。

「ん……」

ウィルフレッドの呻きにびくつと体が跳ねる。

閉ざされていたウィルフレッドのまぶたが開かれ、宝石のような碧眼が現れる。

「起きたのか……」

そう言って、私の頬に手を滑らせる。

私の心臓はバクバク言っている。

何ですかこの無駄な色気は！？死ぬと言ってるんですか？そんな

ですか？そんなんですね！？

そこに、ナイスなタイミングでアラリーナがノックをして入ってきた。私は今の状況に耐え切れず、体を先ほど以上にじたばた動かし、ウィルフレッドの腕から抜け出す。そのままドアに向い走り、部屋を飛び出した。

後ろでアラリーナの声が聞こえるが、今の私はそれどころじゃない。私はとにかく走った。

『はあはあ、死ぬ』

着いた場所は庭らしき場所。色々な花が咲き、風に揺られている。

「あれ？黒猫。どっかから迷い込んできたのかな？」

声が聞こえたと思ったたらいきなり持ち上げられて、声の主と視線を合わせられる。

『わー』

これまた美形である。金髪を風に靡なびかせて、ウィルフレッドと良く似た青い瞳で私の顔を覗き込んでくる。

「あ、黒猫って…。もしかして君ウィルの運命人じゃない？」

彼の友達だろうか？ウィルフレッドのことをウィルと呼ぶ人に出会ったのは初めてだ。

「にゃー」

「やっぱりそうか。俺はウルフガング・シーザ・フォンテーン。ウィルの従兄弟なんだ。ウルフでいいよ」

そう言われてみれば、何となくウィルフレッドと似ている。

「…ウルフ」

いきなり後ろから聞こえてきた声は、ウィルフレッドの声。

「あ、ウィル。おはよ。今ねウィルの運命人を捕まえたんだ。ねえねえ、紹介してよ」

そう言つて、私をウィルフレッドに渡す。

「……………こいつの名前はリン。捕まえてくれたことに感謝する。あとで褒美にカーライル産のランディパイを部屋に送る」

ウィルはそのまま踵をかえし、建物の中に足を向ける。

「マジ！？カーライルのランディパイうまいんだよなあ…じゃなくて！え？ちよっ！それだけ！？あ、ちよっ、まっ、ウィル！」

呼び止めるウルフに目もくれず、黙々と歩くウィルフレッド。どこかしら怒っているように見えなくも無い。

『あ、あの…ウィルフレッド…さん？』

「ウィルだ」

声のトーンが低い。間違いなく怒っている。

『ウイ、ウィル、あの…ごめん…なさい？』

恐る恐る謝ってみるが、ウィルは私を抱えたまま無言で部屋まで歩き、部屋に入った途端私をベットに放り投げた。

お母さん、早くも貞操の危機を感じます。

捕食者との甘い一時

わーわーわー！

どうしようどうしようどうしよう！……！

「リン、何故逃げる」

部屋には既にアラナーナの姿はない。

ベットに放り投げられた私は、猫の本能で見事にベットに着地。急いで逃げようと足を浮かせる。

だが、すぐさま私の上に乗ったウィルの腕に行動を阻まれる。ウィルとの距離わずか2センチ。

「勝手に外を出歩くな。お前は仮にも王に嫁いだ身。いつどこで誰に襲われるかわからない」

今ここであなたに襲われそうです。

ウィルがしゃべるたびに、耳に吐息がかかってびくびく耳が動いているのがわかる。

『「う、ごめんなさい」』

猫である私は、着地したときに必然的に仰向けのような状態になり、真上に乗っているウィルの状態がわからないが、声のトーンの低さや、地味に強くなっていく腕の強さに本気で怒っているのがわかる。

だから怖い。めっちゃくちゃ怖い。

ブルブルと体が震える。

『ほ、本当にごめんなさいっ！』

体も尻尾も丸まっている。

「…フツ」

不意に上から笑いが聞こえたような気がしたと思ったら、頭にちゅつとキスされて影が無くなる。

「飯にするぞ」

何事も無かったかのようにベットから降りるウィル。

『ウィル…？』

恐る恐る身を起こしてウィルを見る。

「あまり部屋から出るな。出るときは必ず俺かアラリーナかウルフに付き添いを頼むこと。それが条件だ」

いつの間にかテーブルの上に用意されている朝食にお腹が鳴る。

ウィルの傍まで行くと当たり前のように抱き上げられ、ウィルの膝に乗せられる。

『えっ！？っい、ウィル！？』

「お前はペットじゃないんだ。床で食べさせるわけにもいかない。テーブルの上に乗るのは行儀が悪いだろう」

そうですね、でもどうやってウィルの膝の上でご飯を食べると言うのですか。

ウィルは、置いてあったパンを一口サイズより少し小さいサイズに千切り、私の目の前に持ってくる。

これは俗に言うあーんというやつですか…!?

「どうした？食べる。毒など入っていない」

いや、そういうことではないのですが…。

未だに目の前に突きつけられるパンと、無言の威圧が押し掛かり、渋々パンを口にする。

『お、おいしい…』

そう言うと、ウィルの空気がやわらかくなったような気がした。

その後、ウィルの膝の上でウィルにあーんされながら朝食を無事に全て食べきった。

ウィルも朝食を食べ終わったと同時にソファーに連れて行かれ、ウィルに毛並みを確かめるように撫でられながらウィルの膝の上で硬

直している私に、ウィルは衝撃的な言葉を放った。

「リン、この後は俺の親族に挨拶することになっている」

『親族：？』

「俺の両親と妹、叔父、叔母、従兄弟、甥、姪、祖父母、曾祖父母」

わー、大家族なんですねー！。

超長寿だから曾祖父母がいることに驚きはしませんよ。むしろ曾曾曾曾曾曾曾父母がいたって驚きませんよ。

というか私何か挨拶しないとだめですよ？

でも猫だから伝わりませんよ？

それを理由に挨拶しなかったら無礼にあたりますよ？

それにウィルのお父様とお母様って言ったらもちろん美形でしょ？

従兄弟のウルフだって美形だったし。

美形×たくさんって…。

どうしよう、自分が惨めに見える…。

絶対自分が霞んで見えるでしょう。

どこにいるかわからないくらい霞むでしょう。

「ウィルフレッド様、リン様、皆様がお集まりになりました」

アラリーナが入ってきてそう告げる。

「わかった」

ウィルは私を抱き上げ、部屋を出た。

それと同時に私は大パニック。

ウィルの膝の上で硬直していた体は、益々硬直し、まるで石のようだ。

その上、心は想像した美形フォンテーン一家によって崩壊寸前。

お母さん、私をもう一度美形に生みなおしてください。

捕食者との甘い一時（後書き）

そしてリンちゃんはこれからご飯をウィル様の膝の上で食べることになるのです。

無口イケメンとほんわか美女

イジメだ。

これは新手のイジメだ。

入った部屋には美形一家が座っていた。

部屋がとてつもなく豪華できれいなのに、部屋を負かす美しさ。

「一番左から曾祖父のウィルスおじい様、曾祖母のシェリルおばあさま」

曾祖父のウィリスはプラチナブロンドの長い髪をゆるく結んでいて、どう見ても美形20代。

奥さんのシェリルも燃えるような赤毛がゆるくカーブを描いている超美人さん。

「その横が祖父のウォルトおじい様と祖母のエノーラ叔母おばあ様」

わお、こっちも素晴らしいよ。

エノーラはシルバーの髪を短くし、宝塚顔負けのかっこよさ。

対して、ウォルトは青い髪を適度に伸ばした無表情のイケメン。

「きゃー、ウィリアム！見て見てっ、かわいいー！」

突然抱っこされたリンは、何が起こったのかわからず固まる。

「サラ、リンがビックリしている。放してやれ」

不満を言いながら私を放した女性はウィルと同じ黒髪で、ちょうどいい長さの髪をポニーテールに結んでいる。

無表情ながらリンを救出してくれた男の人はなんとウィルそっくり。ただ違うのは、ウォルトから受け継いだであろう青い髪。

「はじめまして、私はサラ。ウィリアムの妻でウィル君の母親です。早くリンちゃんの本当の姿がみたいなあ」

「サラ、戻るぞ」

ウィリアムがそう言うと、サラは渋々ウィリアムと真ん中の椅子に戻っていく。

ウィルはそれを見て小さなため息を吐いたあと、再び紹介に戻る。

「父上の隣が父上の妹君のラティーシャ叔母様。その隣がイリス伯父様。そして従兄弟のウルフガング」

ウルフは紹介されると同時に手を振ってくる。

「それから、双子の妹ルシアと一つ下のルイーザとその夫のシリアルに甥のウィーザと姪のリーチェ」

『双子っ！！？』

ルイーザはウォルト、ウィリアムから受け継いだであろう青い髪を横に流して括り、どこかふんわりとしたオーラを放っており、オレソングっぽい髪をしたシリアルと仲睦まじく座っており、まだその腕に抱かれてぐずっている産まれたてであろう息子と娘をみて微笑んでいる。

一方ルシアを見やると、シルバーの髪を後ろで一つにまとめ、興味なさそうにそっぽを見ている。

「ねえねえ、もういいでしょ？私リンちゃんとお話したいなあ」

「……………リンがいいのなら……………」

『私は別に……………』

その美しさに心は崩壊しそうだけど……………。

「シエリルちゃんとエノーラ姐さんとラティにルウちゃんとルイチヤンも一緒にお茶しながらどう？」

サラさん大物だ……………。

飯にも祖父のシエリルさんをちゃん付けしてエノーラさんを姐さんと呼ぶなんて……………。

「私は部屋に戻ろう」

ルシアは立ち上がり、部屋を出て行ってしまった。

『あ……………』

「えー、せっかくルウちゃんともお話ししようと思ったのに…」

結局、ルシア以外の女性陣皆でお茶会をすることになった。

現在リンはサラの膝の上。

「それで、ウイリアムったら独占欲が強くてドの付くSでもう！」

「あら、ウィルスも4000年一緒にいるのにまだ私が他の男性と一緒にいるのが許せないみたいで…」

「ウォルトはああ見えて色々凄くてな…」

「まあ、フォンテーンの男性は皆狼なのです。イリスはああ見えて初心なのです。ウルフはフォンテーンの血を色濃く受け継いだのですね」

「シリアルはいつも優しいです。シリアルの運命人でよかったです。思います。皆さんの話を聞いていると独占欲が強すぎるのも考えようですねえ」

何ですかこの惚気。

ただでさえ美女に囲まれて存在が霞んでいるというのに、惚気のピクオーラのおかげでもう見えません。イジメです。無意識のイジメですこれは。

「ウィルフレッドもフォンテーンの血を色濃く受け継いでいるからな。ウィリアムに性格もよく似ているようだから、今頃我らに嫉妬してドSなウィルフレッドが降臨しそうだな」

エノーラさん、そう言うことを紅茶を飲みながらさらっと言つもんじゃありません。悪寒がします。

「リンちゃんもこれから苦勞するわよ。特に本来の姿に戻ってからフォンテーンの男は基本無表情で無口だから、思ったことは行動で表すのよ。それが何と迷惑なことか…。」

まだ2日も過ぎていないのに、もう既にその兆候が見て取れるのですが…。

「まあ、嫉妬しているのはウィルフレッドだけではないでしょうからご安心を」

それって皆さんも危ないってことですよね？

「まあウィル君は私の血が少し入ってるからウォル君たちよりはしゃべると思つわ」

「あ、噂をすれば」

ルイーザの目線の先には無表情のイケメン4人。こうやってみるとウィルスからウィルフレッドまでの顔の変化の仮定が目に見える。ウィルスから、だんだん顔がウィルフレッドになっていくのだ。

「そろそろお開きだ」

ウィルスがシェリルを横抱きにし、お持ち帰りしていった。

それから各々、各旦那のもとにもどる。

リンも例外ではない。

若干どころではない不機嫌なウィルに、部屋まで抱っこされて連行されるのであった。

あれ？デジャブ？

無口イケメンとほんわか美女（後書き）

ウイル様の独占欲は遺伝だったのです
リンちゃんはまた襲われる予感…

遺伝された独占欲

本日二度目の貞操危機を伴うベッツウィーンです。

『うい、ウイル』

これまた先ほどと同じ体制の私たち。

ウイルの唇が、毛並みをなぞる。

『あ、あの…』

「リン…。お前が他人と話しているのを見ると腹が煮えくり返りそうだ」

あの、相手は女性であなたの親族の方ですが？
しかも少しお茶会をしただけではありませんか。

「お前の変身術を今すぐ解いて…」

そこでウイルは押し黙る。

その先の言葉は聞かないでおこう。

『ウイル…、あの…』

そろそろ開放してくれませんか？という意思をこめる。

開放どころか抱きしめられ、現在今朝と同じ状況。

「もう少し、このまま…」

かすれた声で言われ、心臓が爆発寸前。

誰か助けてくださいっ！

もうどれくらいこうしているのだろうか？

しかし、会話もなく流れる時が嫌ではない。

だが、ドキドキすぎて眠気すらやってこない。

ダラダラしていると、いきなりウィルが起き上がり、部屋の机に向
った。

『…ウィル？』

ウィルが手にしたものは“首輪”。

『えっ…！っ？』

あれ？何故か体が動かないぞ？

「動かないように魔法をかけた。逃げると思ってな」

魔法って…。

そういえばアラーナも魔力云々言ってたような気がする…。

『い、いや、だってっ！』

ウィルはとうとうリンの前まで来てしまい、手に持つ首輪をリンの首に付けた。

「これで俺の物だ」

「リンちゃああああん！！！！」

首輪を付けたことに満足したドSのウィルから開放されたので、アラーナに中庭に連れて行ってもらうとしたら、アラーナ越しに衝撃が声と共にやってきた。

こんなことするのはサラさんしかいない。

「？あれ？この首輪…。…そういうことが。ウィル君はちゃんとウィリアムの血を引き継いでいるのね」

え、ウィリアムさんも首輪を!?

サラはリンの瞬く目から意図を読み取ったようで、苦笑する。

「私も異世界から来たのよ。私最初は小型犬で、お転婆な上に城が広くてしょっちゅう迷子だったから、居場所がわかる魔法をかけた首輪を付けさせられたわ」

サラさん異世界から来たんですか。仲間ですね。

その前に、私一応大人しいと思うのですが…。

「リン様は広い心と無防備持つておいでです。きっとウィル様が心配されたのでしょう」

え、アラーナ今さらっと傷つくような言葉を言いませんでした!? 私無防備じゃないヨ。

アラーナが言うには、この首輪は付けている者の危険をいち早く伝えることができるらしい。

「私もなんと首輪に助けられたことか…。穴に落ち、溝に落ち、池に落ち、迷子になり、連れ去られそうになったり…。まあ、その度にウィリアムが颯爽と駆けつけて来てくれたんだけど。」

サラさんの周りにハートが飛んでいる幻覚が見えます。

「あ、そうだ。本来の姿に戻ると新しいのもらえるから楽しみにしててね」

……………楽しみになんてできません。

自分で凄いこと想像しちゃってチキン肌です。

お母さん、ウィルがそっちのsだったらどつしよつ。

遺伝された独占欲（後書き）

遺伝バンザイ！
ドSバンザイ！

初めての喪失感

朝起きると隣にいるはずのウィルがいなかった。

『ん…』

朝の日差しに意識を浮上させる。

「おはようございます、リン様」

挨拶をしたのはアラーナ。

ふと、隣に温もりを感じないことに違和感を感じた。

「ウィルフレッド様は、先ほどお仕事のほうに向われました」

アラーナは朝食の支度を始めた。

ウィルだって王である。

運命人のリンのために休暇をとっていたのだ。

本来ならば多忙なはずだ。

『しっかし暇だなあ』

くわつとあくびをしてふかふかのクッションに顔を埋める。

最初少し部屋に放置されはしたが、それからはずっと付きっ切りだったのだ。

『なんか…』

自分の半分が無くなったかのような喪失感。

今まで傍にいただけでドキドキだった。

それが災いしたのか、広い部屋に一人のせい、シーンとした空気に物足りなさを感じる。

こんな気持ち初めてだ。

アラリーナも屋敷の手伝いに行っていない。

完全に暇を持て余していた。

その時、部屋のドアがノックされた。

「やつほ。元気してる？」

やってきたのはウルフだった。

「ウイルがいなくて寂しい思いをしてるんじゃないかって思ってね。そしたら案の定暇を持て余してるみたいで。あ、これ食べようよ」

ウルフは手に持っていたパイをテーブルに置いた。

「カーライル産のランディパイ。すごいおいしいんだ」

そう言うと、ウルフはテーブルの上に紅茶のセットを転送した。

「あ、首輪つけられちゃったんだね。さすがウィル。それね、王族に嫁いだ異世界から来た何も知らない運命人を護るために作られたんだよ」

そう言って、ウルフはパイを小さくしてリンの口に運ぶ。

リンは大人しくそれを口に入れる。

「フォンテインの男は大体付けね。それだけ運命人が大事だから。…いいなあ、俺あともう少しだけど待ちきれないや」

ウルフはあともう少しで20になるらしい。

「しっかしウィルがあんなになるなんてね。初めて仕事に行くの渋ったらしいよ。今まで仕事馬鹿だったのに」

ウルフは楽しそうに言う。

「やっぱり大切なんだね、リンちゃんが」

トクンと心臓が高鳴った。

「リンちゃんもウィルと離れてみて感じてるんじゃない？喪失感とか。父さんが言うには、体半分が無くなったみたいな感覚だって言うってけど」

ウルフに言われた通り、ウィルがない喪失感をずっと感じている。ウルフには失礼だが、ウルフがウィルに変わってくれればいいのになと思ってしまうほどであった。

顔に出ていたのだろうか、ウルフが苦笑して言った。

「そんなに寂しいならウィルのところ行く？きっと朝からずっと根気詰めて頑張ってると思うんだ。ちょっと休憩させがてら行こうよ。パイ持って」

そう言って、パイを右手に、リンを左手に持ち、部屋を後にした。

それはまるで全てを失ってしまったかのような辛い気持ち。

仕事姿に見とれて嫉妬されてキスされて

「リンちゃん、ちょっとここに入ってて」

そう言われて、入れられた場所はウルフの上着の下。

ウルフが支えてくれているが、ちゃんと頭が出るように前足をかける。

着いた部屋は本がずらりと並んだ大きい部屋だった。

『図書館かつ！？』

突っ込んだリンを、目をこれでもかつ！と開いたウイルが見る。

「リン！？」

がたつと立ち上がったウイル。

その隣に立っていた執事らしき人も驚いている。

ウイルは、まるで王子様が着るような白い制服に身を包み、仕事特有の硬い雰囲気を出していた。

か、かつこいいい！

数時間離れていたただけなのに、会えて満たされていく心を感じる。

「やつほー。頑張ってるウイルにご褒美持ってきたよ！」

ウルフはリンを上着から出し、近くにあったソファーに座らせ、ソ

ファアの前の机にランディーパイを置いた。

「何のつもりだ、ウルフ」

わーわー！ウイルめっちゃ怒ってる！

「そう怒らないでよウイル。仕事しっぱなしで疲れてると思って癒しを持ってきたんだ」

そう言っつて、ウルフはパイを口に運ぶ。

「…まだやることが残っている。気が散る、リンを連れて部屋に戻れ」

そっけなく言われた言葉に、リンの耳が垂れ下がる。

「そんな言い方しなくてもいいじゃん。いいもん、見せ付けてやろうぜリンちゃん。ほらあーん」

リンの頭をなでなでし、パイを小さくしてリンにあーんする。

ダンッ！

『うわっ！』

いきなり大きな音がして、びくつと体が跳ねた。

「シルフ、ウルフを追い出せ。それが終わったら、後は俺一人でやる。帰っていい」

地の底から出ているような声でウィルが言う。

「はい」

シルフはウルフに「失礼します」と言っただけだ。

「うわっ！？ちよっ！シルフ！あぁっ！ランディパイがつ！！！」

ウルフが連れ去られていくのをぽかーんと見ていると、隣が沈んだ。ウィルがソファーに腰掛けたのだ。

「リン」

呼ばれて振り返る。

『むぐっ！』

それと同時にパイを突っ込まれた。

必死にもぐもぐしていると、抱きかかえられ、ウィルの膝の上に乗せられた。

「お前は無防備すぎる……」

ウィルはため息を吐き、机の上に紅茶を出した。

ウィルが入れてくれた紅茶は冷めていて、猫舌なリンにも飲みやすい。

なめるように紅茶を飲んでみると、突然ウィルと向き合わされる。

仕事姿に見とれて嫉妬されてキスされて（後書き）

初チューですよ！全員集合！

エイジー・リンドグレーン(前書き)

ちよつとグロイ表現あり

エイジー・リンドグレーン

目を開けると暗闇が広がっている。

『何…？』

事の発端は、中庭でのんびりをしていた時であった。

「リン様、お飲み物はいかがですか？」

今日の付き添いはアラーナではなかった。

彼女はちょうど来ているお客様のお世話をしている。

「にゃー」

侍女の問いにうなずき、水を貰う。

ふと、頭を撫でられる。

その手から何か暖かいものを感じ、中庭に挿し込む日差しも手助けして眠りに落ちたのだ。

「お目覚めでございますか？」

目覚めるとそこはもう中庭ではなかった。

話しかける女の声は、間違えなく城の侍女の声。

目隠しをされ、どこにいるかもわからなかったが、この状況でまだ城の中にいるという事は考えにくい。

「主が参ります。もう少々お待ちください」

しばらくすると靴音が聞こえ、部屋に誰が入ってくる音がした。

「やあ、こんにちは王妃。俺の名はエイジー・リンドグレーン。あの団体のリーダーだ」

そう言う男の声は冷たい。

「俺達は異世界から運命人が召喚されることが許せない奴らを集めた集団さ。皆異世界から来た運命人に恨みを持っているんだ。俺もその一人。どこの世界からやってきたか知らねえが、俺の運命人は異世界の狂人に殺された」

静かに言う男の言葉には怒りが隠れていた。

「てことで、運命人を比較的何もできない動物のうちに殺しちゃおうって言うのが俺達さ」

体が恐怖で震える。

必死に逃げようと体を動かそうとするが、動けない。

「逃げられねえよ。魔法かけてあんだ。最初の三ヶ月は異世界から来た運命人は安定してねえから魔法は教えられねえんだ。だから抵抗すらできねえのさ」

クククツと笑いながらリンドグレインが近づいてくる気配がした。

「よかったな。元の姿に戻れて。だが苦しいかもな。まだこの世界に馴染みきつてない体を本来の姿に戻してやるだけだ。知ってるか？世界に馴染まないと体が壊れてくんだよ。少し押しただけで骨がボキボキ折れてって、少しつめを立てただけで血が噴き出すんだ。呼吸だつてまともにもできやしねえ。そうやってだんだん苦しんで仕舞いには殺してくれって俺の足に縋り付くんだ。優しい俺はな、殺してやるんだよ。確実に死ぬるように首吹っ飛ばしてなっ！あははははははははっ！」

大笑いするリンドグレイン。

そして笑いをぴたりと止め、リンに近づぐ。

『い、いやあー！』

「ククツ、にやーにやー言ってもわかんねえよ」

リンドグレインはリンの目の前まできて、横たわってるリンに手を翳す。

すると、リンの下に魔方陣が現れ、光出す。

『…あああああああああ！！！』

途端に体が変わっていく感覚。
全てが元に戻っていく。

「あああああああ！…！」

そして息苦しい。

叫ぶともっと苦しいのに、体が変わる感触に声を上げずにはいられない。

全てが変わると同時に息苦しさがリンを襲った。

「はっあ、は、は…あ、っは、は」

うまく呼吸ができない。

「どうだ気分は？しかし綺麗だなお前。殺してしまうのがもったいなくらいだ」

そう言っってリンの髪を撫でる。

気持ち悪い。

「ち…ら…いで」

「ん？聞こえないな」

「さわ…ないでっ」

流れる涙は止まることを知らないようだ。

男が耳元で囁く

「今から地獄を味合わせてやるよ」

その囁きはまるで魔王の囁き。

救出される体

「た…けてっ、うい…る」

その声は届かない。

「驚いた。この短い期間でよくこれほどこの世界に馴染んだな」

私の肌につめを立てるリンドグレーン。

地面に転がされているだけで、自分の体重が掛かった体は痛い。

そこにつめを立てれるとその痛さはまるで刃物を突きつけられているよう。

「あゝあゝっ！」

「まあ、そうは言っても通常の何倍も痛いはずだ。蹴ったりしたら内臓破裂の痛みなんじゃねえか？」

目隠しをされているため、いつどこに痛みがやってくるかわからない。

その上、リンドグレーンに気絶しない魔法をかけられたようだった。意識が一瞬飛ぶが、本当に一瞬で、次の瞬間には戻される。

「つうい…る…っ！」

ただひたすらウィルに助けを求める。

「はっ、王に助けを求めても無駄さ。王は今頃俺の仲間と遊んでる。もしかしたら自分の運命人が消えたことにも気づいてないんじゃないかねえか？」

「ういるっ…！」

わかっている。

だが体が動かず、声しか出せないリンにはウィルに助けを求めるしかなかった。

「往生際が悪いねえ」

「きゃあああああああ！！！！」

きつと肌を強く抓られたのだろう。

だが、今のリンにはそれは肉を引きちぎられるに相当する。

「ふーん、体の方は粗方馴染んでんだ。体はなんともないけど神経がまだなんだな。普通は抓ったら皮膚が取れちゃうんだがねえ。まあ、その分痛めつけられるのが止まらないってことだな。分かるか？体は無事だが精神がズタズタになるっちゅう最悪のパターンさ」

楽しそうにいうリンドグレーン。

「あ…っ、は…あ…、やっ…っ…うい…るっ！ウィルっ！」

ありったけの声で叫ぶ。

「っ、何だ…！」

リンドグレンが少し焦っているようだが、目隠しをされているためわからない。

瞬間、体が浮遊感に襲われる。

「リン…」

「っ、あ」

ウィルの声が耳たぶを打つ。

だが、ウィルに締め付けられ、体は悲鳴をあげる。

「またまた驚いたな。まさか王を召喚するとはな」

リンドグレンの声が少し離れた場所から聞こえた。

「リンドグレン…」

ウィルの地を這うような声に体が震える。

「分が悪いな。今日はここで退散させてもらおうか」

そして、リンドグレンの気配が無くなる。

それと同時に目隠しをはずされ、ウィルの顔が見えた。

「リン…、リン…」

「うい…る…痛っ！…はな…て」

ウィルに抱きすくめられている体が悲鳴をあげる。

「ウィル、痛がっている。離せ。そしてそこをどけ」

ふと他者の女性の声が聞こえ、そこに目を向けると、ルシアが軍服に身を包み立っていた。

ウィルは渋々という感じでリンを離し、全裸のリンに上着をかけ、宙に浮かせた。

どこにも触れていない体は先程よりも痛みは無かったが、息苦しさは残った。

「リン、すまない」

ウィルが壊れ物に触れるような手つきでリンの頬を撫でた。

その手に助かったんだと安心した。

救出される体（後書き）

後で修正しますともorz

奪われた半身

全てを奪われた気がして目の前が真っ白になった。

「ウィル、クラークがリンドグレーンと繋がっていたらしい。今私の部隊が応戦している」

突然のルシアからの報告。

ルシアは、女で王族であるが、国の第一騎士団団長でもある。

既に先代の王と王妃達は戦いに参加しているだろう。

「俺も応戦する」

そう言って部屋を出た。

「っ！？リン！」

突然、リンにつけた首輪が城の敷地の外に出るのを感じた。そして居場所が掴めなくなった。

「ルシア、リンが攫われた可能性がある」

そう言うと、ルシアは敵と応戦しながらこちらを見た。

声は冷静だが、内心凄く焦っていた。

「そうか…。嵌められたな。さっさと片付けよう」

ルシアはより一層魔法を強く大きくした。

「どうだ…」

粗方片付けたところで、リンを探す。

「まだだ…。どこだ、リン」

必死で首輪の気配を探すが、妨害工作をされているらしく中々掴めない。

<ウイルっ!>

リンの声にハツとした瞬間、自分の下に魔方陣が現れた。

「ウイル!」

「リンだ！」

すぐさま魔方阵を止めようとしたルシアにそう叫ぶと、ルシアも魔方阵の上に乗った。

瞬間景色が変わり、足元に横たわった女の姿が目に入った。

すぐにリンだとわかった。

「リン……」

横抱きにし、抱きしめる。

「っ、あ……」

リンが苦悶の声を上げた。

無理やり元の姿に戻されたのだろうリンの体は今、少しの衝撃で大変な痛みを伴うだろう。それがわかっていても離すことはできなかった。

「またまた驚いたな。まさか王を召喚するとはな」

少し離れた場所に退避しているリンドグレーンの姿が目映った。

「リンドグレーン……」

怒りが湧き上がってきて、声が低くなる。

「分が悪いな。今日はここで退散させてもらおうか」

リンドグレンはどこかに転移したらしい。
だが、それを追うつもりはない。
今はリンが先である。

目隠しをはずすと、この世界に来たときに変わったであろう虚ろな
金色の瞳が見えた。

「リン…、リン…」

「うい…る…痛っ！…はな…て」

抱きすくめると、リンは痛そうに身を振る。

「ウィル、痛がっている。離せ。そしてそこをどけ」

ルシアから声がかかり、ハッと我に返って裸のリンに上着をかけて
宙に浮かせた。

すると、リンは痛みを感じなくなったのか、歪めていた顔を少し穏
やかにするが、息苦しそうにしていた。

「リン、すまない」

こうなったのも全て自分のせいである。

クラークの策にまんまと嵌められたのだ。

リンの頬を震えた手で撫でると、リンは意識を手放した。

青白い肌を見てもう目を覚まさないのではないかと思ってしまった。

奪われた半身（後書き）

ウィル視点でした

差し込んだ光

まだ目を覚まさないのか…？

「ウィル、そろそろ」

ルシアがウィルに仕事の催促をする。

あの事件以来、ウィルはリンの傍を離れようとしなかった。

リンは体こそ何ともないが、精神はボロボロだった。

あれから一向に目が覚める気配は無い。

「頼むから仕事をしてくれウィル。お前に仕事をさせなければ、私は研究に取り掛かれない。リンが目覚めが遅くなるだけだ」

ルシアは魔術の優秀な研究者でもある。

今回は、リンが早くこの世界に馴染ませる魔方陣の研究をしている。無理やり変換させられたリンの体を再び動物に変えるのは、リンの体もたないと判断されたからだ。

ウィルは無言で机に向う。

リンは常にウィルの近くにいる。

魔法で宙に浮かされ、何にも触れぬようにされている。

「…見込みはあるか？」

「……………わからない。こんなこと初めてだ。リンドグレーンがあんな無茶なことをして、尚且つそれに耐え切れた運命人なんて過去にいなからな」

ルシアはそれだけ言うと、部屋を去った。

後に残ったウィルは、顔を手で覆った。

「リン…」

「…お母様」

ルシアの研究室にはサラがいた。

「私も手伝うわ。ルウちゃん一人で大変でしょ？ウィリアムの許可を取ってきたの。何よりリンちゃんのためだから」

サラは見かけによらず、とても頭がいい。

ルシアの頭の良さはサラから受け継いだものだ。

「ルウちゃん、これ見て」

サラが手にしているのは古びた本。

「これは…、運命人の召喚の儀が始まった時の…。【異世界からの運命人とこの世界】…」

本を開いてみる。

「っ、お母様！この魔方陣、まだ途中ですが、これなら…」

「ええ、リンちゃんをこの世界に馴染ませることができるかもしれない」

それは24代目の王および、初代魔術師の資料だった。

先の見えない闇に光が差しこんだ。

「ウイル君！できたわ！」

バーンという音と共に部屋に入ってきたサラ。その後ろにはルシア。

「この魔方陣を使えば異世界から来た運命人をすぐにこの世界に馴染ませることができる」

「すぐに準備する」

ウイルは、すぐさま立ち上がり、部屋を出て行った。

初めてリンがこの世界に召喚されたときの部屋には、リンを早急にこの世界に馴染ませるための魔方陣が描かれている。その魔方陣の上には、リンが青白い顔で横たわっていた。

「始める」

ウィルがそう言うと、魔方陣が光りだした。

そのまま光がリンの体に入っていき、最後にはリンの下の魔方陣は消えていた。

「リン……」

ウィルが近づくと、先ほどまで青白く、浅い呼吸を繰り返していたリンの頬に赤みが差し、呼吸も穏やかになっていた。

「まだ意識が戻るまで油断できないが、ひとまず安心だろう……」

ルシアの言葉に、ウィルはリンを抱きしめた。

リンが穏やかに呼吸しているのを見て、自分の中の波も穏やかになった気がした。

差し込んだ光（後書き）

次回、リンちゃんが目を覚めます！

奪われた唇

ふわふわとした意識がゆっくりとはっきりしていき、目を開けた。

「リン…」

目を開けたそこにはウィルが心配そうに私の顔を覗き込んでいました。

「うい…るっ」

舌がうまくまわりません。意識もしっかりしてません。体も動かさじらいです。

「ど…して…」

ここに寝ているのだらうと、一番最後の記憶を掘り起こす。

「あ…」

リンドグレーンに攫われた事と、強烈な痛みと疲れを思い出す。

体が震える。

今まであんなに痛い体験はしたことがない。

震える体をそつとウィルが包んでくれる。

「気分はどうだ？」

ウィルの後ろからルシアの声が聞こえた。

「あ…、特に…。体が…動かさにくい…です」

「それでもまだマシな方だ。これからしばらく私が経過観察と体調管理をさせてもらう。何か変化があつたら私に伝える」

ルシアはそれだけ言つと部屋を出て行つた。

「ウィル…。助けてくれて…ありがとう」

「…俺はお礼を言われる筋合いはない。俺はリンに謝らなければならぬ。クラークの策にまんまと嵌められて、リンに辛い思いをさせた」

ウィルは私が寝ている間に随分と変わったようだ。前よりしゃべるようになった。

「ウィルの…せいじゃ…ない。私が…もつと…っ!？」

その先はウィルの唇のせいで言えなかった。

「それでも俺のせいだ。リンを守れなかった」

ウィルはリンを包んでいる腕を一層強くした。

「リン…」

「うい…っ」

それからウィルに口付けの嵐でほとんど会話という会話をしなかったが、リンの不安を取り除くには十分すぎるほどだった。

いつの間にか眠っていたらしい。

外はまだ夜更けと言う感じだった。

あれから私から全く離れなくなり、過保護と化したウィルと一緒に眠っている。

そっとベッドから抜け出し、鏡の前に立つ。

「本当に…戻ったんだ…」

そこには長い黒髪で金色の瞳の少女の姿。

瞳はこの世界に来たことで、黒から金に変わった。

「リン…」

ベッドからウィルの声が聞こえてベッドのほうを見ると、ウィルが上半身を起こしてこちらを見ていた。

「起こしちゃった？」

ベッドに近づき腰掛ける。

「きゃっ…ん」

そのまま腕を引かれてキスされる。

「俺から離れるな」

腰を引き寄せられ、抱きしめられる。

「ウィルっ…、近づ…」

今度は深い口付け。

「ん…ふっ…はぁ」

「寝ろ」

静かな声で言われ、頭を撫でられると眠気が襲ってきた。眠気に逆らわず意識を落とす。

また唇にウィルの唇を感じた。

あ、ファーストキスさらっと奪われた。

奪われた唇（後書き）

チユーしすぎじゃね？

魔法学園

魔法の学園…ですか？

「リン、調子はどうだ」

アラーナを連れて城内を散歩していると、ルシアに会った。ルシアは白衣に似た白い服を着ている。この世界での白衣のようなものらしい。

「大分調子はいいよ」

あれから2週間経ち、体調も幾分回復した。

「でも、たまにブツンと意識が途切れて眠りこけることがたまにあるけどね」

「この世界に体が馴染むには睡眠が一番手っ取り早い。眠気に襲われたときは身を任せろ」

ルシアは人見知りなだけで、根は優しい。ウィリアムの、否、フォンテーンの近づきがたいオーラを出しているところを濃く受け継いでいるだけなのだ。

「しかし、入浴の際に寝てしまわれた時はとても驚きましたわ」

アラリーナが苦笑しながら言う。

実はこの間、お風呂に浸かっている最中に眠気に襲われ、眠ってしまったがために溺れてしまいそうになるといふ事件が起こった。

「それは…危険だな。ならばウィルと共に入れればいいではないか」
ルシアが真面目な顔で言う。

「な、ななな、る、ルシア!？」

顔を真っ赤にして驚く。

「まさか…、まだ…」

「あああああああ!?!?!ちよ、ちよちよちよ、ちよっと部屋で一緒にお茶しない!？」

リンはルシアを引っ張り、強引に部屋に連れ込んだ。

「ほう、あのウィルがな…。まあ、今はまだリンの体がこの世界に馴染みきつてないから夜あまり励むのはお勧めしない」

「い、いや、だから!なんでルシアはそう言うことを真顔で言うの!?!」

ていつかあのウィルってなにさ！

「大事にされているってことに変わりはないからいいのではないかな？」

ルシアの言葉に頬を染める。

「それに、これからは少しずつ魔法の勉強をしなければならぬから今はこの世界に馴染むことを優先するように」

「魔法の勉強!?!」

「?聞いてないのか?魔法をウィルと共有しているんだ。自分の身を守る魔力はある。それどころか、この国吹っ飛ばしてもまだ残るくらいの魔力をウィルは持っている」

国吹っ飛ばすですって!?!

最強かつ!?!

「その力を有効に自己防衛に生かすために魔法を学ぶ義務が王妃にはある。要するに早くウィルを安心させるってことだ」

ウィルはあの事件以来、より強い防御魔法と探査魔法をかけている。その魔力の減りは魔力を共有しているリンにもわかる。その上、魔法をかけているウィルには負担がかかるのだ。

魔力は共有しているが、使う方にしか負担が掛からないらしく、リンにはどれ程ウィルが疲れているかわからないのだ。

「まあ、ウィルは体力があるから、リンにいくら強い魔術を施しても微塵も疲れないだろうがな」

「えっ！？そうなの？」

「私が言っているのは気疲れのほうだ。お前はチヨロチヨロと城を動き回るからな。まるで昔の…いや、今もそうか、…お母様のようだ」

サラさんには悪いが、あんなに動いてウィルを困らしているつもりはない。

「まあ、あの学園は私もウィルも通った学校だ。警備は万全だし、教授も王族の関係者で心配は何一つ無い。唯一心配があるとしたら、ウィルが素直にリンを学園に通わせるかだな」

「が、学園！？」

てつきり家庭教師みたいな人が来て、教えるのかと思っていた。

「ああ、あそこは身分関係無しに教えるから、リンは普通に友達もできると思う。私もウィルも王族ということを隠して通ったからな。まあ、別にばれたらどうにかなるって訳ではないから、本当に危なくなったら正体を明かせ」

あ、危なくなったらって…なにがあるのでしょうか…。

「まあ、通うのは次の召喚の儀の後だからもう少し後だな。異世界からきた者は少数だが、三ヶ月で一学年だから、それなりに人数はいる。変な奴も多いから気をつける。たまに戦場から召喚されてき

た奴とかいるから」

わー、不安要素いっぱいだわあ。

魔法学園（後書き）

リンちゃんがこんなにしゃべるの久しぶりw

魔法学園入学

朝、起きたらウィルの膝の上でした。

これはもう慣れっこなのです。

ウィルが執務に私を連れて行くようになってから、朝早く起きれない私はアラリーナに寝たまま着替えさせられ、起きたらウィルの膝の上という生活をほぼ毎日送っております。

先日召喚の儀も終わり、それに参加していたウルフの運命人のクリステイーナが家族に加わりました。

召喚の儀が終わったことで、これから世間は例の魔法学園の入学シーズンとなりました。

「リン…」

「んっ…」

いつでもどこでも会えないと寂しがるウィルが、引っ付いて離れないのだった。

「もう！ウィル！いい加減に…」

いつも無表情なウィルが眉を下げている…だとっ！？

顔を真っ赤にして固まるリンをここぞとばかりにキスしまくるという行動がもう一週間続いている。

その後、執事のシルフの声でやっと開放されたのだった。

リンがこれから通う魔法学校は、フォンテーンだけでなく、各国からも生徒が集まる。身分制度は通学の間だけ取り消され、身分差別をすることは校則で禁止されている。

今回の入学式では襲撃防止のため覆面をしているが、フォンテーン王国、カーライル王国、アロイス王国、レヴァイン王国、リウォール王国の五大王国の国王が出席している。

入学式は三ヶ月に一回あり、三ヶ月で一学年である。

「あ

睡魔に襲われ舟を漕いでいると、膝に置いていたプログラムが隣の女の子の下に落ちた。

「はい

にこつと笑ってプログラムを渡してくれた女の子は超絶美人だった。

「あ、ありがとう

「いいえ、あの、私ずっとお話する機会を伺っていたのです。お友達になりたくて……」

「え！本当！？嬉しい！私リン・シノミヤ。リンでいいよ」

「私はアイリーン・ローカーと申します」

いかにもお嬢様という感じのアイリーンは、ゆるいカーブの金髪の容姿端麗で女のリンも見惚れる美女だった。

異世界から召喚された運命人で、三ヶ月前にこの世界にやってきたのだそうだ。

その後も、アイリーンと色々と話しているといつの間にか入学式が終わり、その場解散のため式場前でアイリーンと別れた。

「初日はどうだった？」

夜、寝る前にアラナーナの淹れた紅茶を飲みながら今日のことを報告する。

「友達ができたの！アイリーンっていう子なんだ！」

まるで子供のようににはしゃぐリンに対し、ウィルはムスツとしている。

「ああ、知ってる」

知ってるのに聞いたんかい！

というかストーリーカー！？

「アラーナ、今日はもう休んでいい」

そう言うウィルに、アラーナはクスリと笑い、礼をして部屋を出て行った。

「あ、あの、うい……っん！……はっ……あ……ふっ」

深い口付けのあと、ベットに横抱きで強制連行される。

「リンとの時間が減るのは辛いな……」

意識が朦朧としている中、耳元で囁かれ、リンは爆発寸前である。

「ウィルっ……！」

「何もしない……。このまま寝かせる……」

リンを抱き枕状態にしたまま、ウィルは寝息をたてはじめる。

「ど、どうしよう……。寝れない……」

その後、ドキドキして眠れそうにないリンは、ちょうどきた変換の副作用の眠気によって運良く寝付くことができたのだった。

副作用ナイス！

魔法学園入学（後書き）

甘いぜー！

不思議な出会い

リンが入った異世界クラスは、10人のクラスであった。

「あんまり人がいないですね」

アイリーンが周りを見渡しながら言う。

教室の机に一人ずつぽつぽつと座っている。

固まって座っているのはリンとアイリーンだけだ。

「あ、教授？」

薄めの本を持って教室に入ってきた青い髪の男。

この世界の人は老いないため、生徒と教師の区別がつかない。

「俺はこのクラスの担当教授のランバート・ハーシエルだ。お前らにはまず基礎から防御魔法から学んでもらう。この世界は異世界人にとって危ないことが多いからな」

その言葉で、リンの頭にリンドグレーンのことが浮かんだ。

「ある程度この世界について運命人に聞いているだろう。今日は、もう少し詳しくこの世界について学んでもらう。まずはこの世界での身分制度について」

先生の下から球体が浮かんできて、三角に変形した。
まるで食物連鎖の図みたいだ。

「下から平民、貴族、王族となっている。この世界は、主に五大王国から成っているが、どの国にも奴隷はいない。今から5万3000年ほど前に廃止された。異世界人の身分は、相方の身分と統一される」

「そういえばリンさん、この学年、フォンテインの王族の運命人も通っているんだそうです。この学園では身分を明かすことが極端に少ないですから、どこで王族の方と接触しているかわからないってことですよね。今までで無礼を働いていないといいのですが…」

すみません、アイリーンさん。

その人あなたの隣にいたりします。
というか無礼なんて滅相も無い！

「次に、魔法についてだ。元の世界で魔法がなかった者もいるだろうが、相方に魔力があれば魔法は使える。あとは魔獣。本来、召喚獣として扱われることもあるが、野生の魔獣はなんでも食うから気をつける」

え！？魔獣なんて一度もあつたことがないんですけど！

「魔獣を恐れるな。異世界人は大抵召喚獣を持つ。この学園でも持つてもらつたことになっている。恐れていたらいつまでたつても召喚獣が見つからない。まあ、召喚獣と言っても色々ある。ある奴は人間を召喚獣としていたからな。要するに生きているならばなんでも召喚獣になれる。召喚獣というのは名だけだ」

この学園では召喚獣は強制なのか…。
どうせなら愛着が湧くような姿がいい。

リンは気持ち悪い魔獣を想像し、顔をしかめた。

「お前たちは、反異世界団体から身を守らなくてはならない。反異世界団体は、大体が異世界人によって害をもたらされたやつらが集まっている。捕まったら生きて帰ってこれる確立は絶望的だ」

クラスには緊張の糸が張り詰め、リンは鳥肌が立った。

リンドグレインは正直トラウマで、名前も聞きたくない。

「…空気が暗くなったな。授業初日はここまで。課題を出そう。一ヶ月以内に召喚獣を見つけること」

そう言ってランバートは教室を出て行った。

「てことで召喚獣を探してるんだよね…」

ウィルの城に戻り、執務中のウィルに相談する。

「……………そのうちいい奴が見つかるだろう」

ウィルにしては投げやりである。

「…気長に待つか…」

そう言って目を閉じた。

「ん？」

暇すぎたので、只今中庭を散歩中です。

「ひーひっ、よー！」

普段お目にはすることはまずない獣と出会いました。

「豹！？」

しかも黒いです。

じつとこちらを見ており、だんだん近づいてきます。
だれかヘルプ！食われる！

とうとう目の前まで来て、食べられる痛みに覚悟していると、足に
なにかさわさわと感触が。

「うおー！」

なんと黒豹が足に擦り寄っているではありませんか！
こうやって見るとなんか…。

「かわいい…！」

すると「つちを見る黒豹。

瞳は青く、まるで…。

「ウィルみたい…」

それは中庭での不思議な出会いでした。

不思議な出会い（後書き）

夜遅くなって申し訳ないです！

黒豹さんと契約しよう

何このかわいい動物！

すりすり、さわさわ。

立っている私の手に無理やり頭を押し付けてなでなでさせる黒豹。触れる毛並みはさらさら。

「君、どこから来たの？」

しゃがんで視線を合わせながら聞く。

「ひゃっ！」

寄られて顔をなめられる。

随分と懐いてくれているようだ。

「あ、召喚獣」

無理やり撫でさせられながら召喚獣のことを思い出す。
果たしてこの黒豹は魔獣なのだろうか…？

「君は魔獣ですか？」

答えが帰ってくるわけ無いが、聞いてみる。

「…」

手にまた擦り寄ってくる。

これは魔獣であると受け取っていいのだろうか？

疑っていると、黒豹が少し離れ、足の下に魔方陣を出した。

「うお！」

その魔方陣から噴水のように水が飛び出る。

「……………すごいね、君」

この黒豹が召喚獣なら、ウィルも心配いらないうらなう。

もっとも、私の召喚獣に関しては珍しく全くもって興味が無いようだったが。

「あの…、えっと…、私の召喚獣になつてくれませんかっ!?!」

立ち上がって手を差し伸べる。

さわっ。

「!」

その手に擦り寄ってくる黒豹。

これはYESととってもいいんだよね。いいよね!?!?

「ありがとうっ!」

黒豹の首にぎゅっと抱きつく。
もう、恐怖なんかない。

……………ここからどうすればいいんだろっ。

「え!？」

困っていると、下に魔方陣が現れる。

魔方陣から発せられる光りに包まれ、前が見えなくなった後、数秒後に視界が戻った。

「…なに? ……あれ?」

その黒豹の首には銀で作られたチョーカーのようなものがあつた。自分の首にも触れてみると、何かある感触がある。

「…契約完了?」

そう言うと、再び顔をなめられた。

「でね、その召喚獣が黒豹なんだけど、毛並みがさらさらですっく綺麗なの!」

夜、アラリーナに召喚獣について報告する。

「そうですか。早く召喚獣が見つかってアラリーナは安心です」

ニコツと微笑むアラリーナ。

向かいに座っているウィルは無反応。だが、ちよつと機嫌がいい。

「ウィル、なんか良いことでもあった？」

「ああ」

ウィルが少し微笑んだように見えた。

「アラリーナ、今日はもういい」

「はい」

アラリーナは部屋を出て行く。

それと同時にウィルに抱えられ、ベットに降ろされる。

そしてチョーカーをはずされた。

取り外し可能なんだ…。

「あ、ウィルにも今度会わせて上げるね」

「…それは無理だ」

「何で？」

「……………いい加減寝ろ」

腰を引き寄せられ、耳元で囁かれ、キスされた。

顔が真っ赤なのが自分でもわかる。

未だにウィルの免疫がついていない。

寝ないとひたすらキスの嵐が降ってくることは今までで十分学習済みだ。

「お、おやすみ！」

そう言って目を閉じ、ウィルの温もりにすぐさま意識を手放した。

あれ？なんかはぐらかされた気が…。

魔力を使うと疲れるのです

今日は何故か教室が暗かった。

「今日は魔力を注ぐ練習をやる」

そう言うランバートの手には小さなビー玉のような透明な玉。

「これに魔力を注ぐと光る。これは一般的に暗闇を照らす光として使われている。最も簡単に使える魔具だ」

先生が数個の玉をリン達の目の前に浮かばせる。

「最初は手に持ってやってみる」

玉を手にとってみる。

「んー、光らない…」

アイリーンも難しい顔をしている。

「私も光りません。どうやって魔力を込めればいいのか…」

「自分の魔力の泉から引き出せ。イメージするだけでいい。そのまま玉に意識を持っていくだけでいい」

リンは、自分の奥深くにある、大きな泉を少し前から感じていた。ウィルが魔法を使うたびに減っていくことから、それが魔力の泉に違いない。

「…………っ！」

目を閉じ、魔力を少しずつ吸い出すイメージをすると少し魔力が引き出せた。

そのまま手の中の玉に持つていくイメージをすると、玉に魔力が流れ込んでいくのがわかった。

「リンさん凄い！光ってます！」

目を開けると弱い光だが、玉が光っている。

「もう少し魔力を増やしてもいい。これくらい」

ランバートの手の上に浮かんでいる玉が部屋を照らす。

それを見て、少しずつ魔力の量を増やしていく。

「そうだ。そのまま」

ランバートと同じくらい強い光になる。

「あ、私も光りました！」

隣のアイリーンも、リンほどではないが玉が光った。

「いいか、魔力は使っているうちに自由自在になるだろう。経験が必要なものだ。魔力を好きなように出せるようにならないと、魔方阵も使えやしない。それどころか、魔具を使えない。魔具はお前たちにとって一番最初に使う防御となる。家にある魔具でいい。練習

して、自由自在に操れるようになることが今回の課題だ」

そう言っつてランバートは教室を出て行った。

「ウィル、魔具無い？」

ウィルの執務室に行くと、シルフが待つてましたと言わんばかりにこちらに寄つてきて、リンに一冊の本を渡した。

「そこにはあらかじめ魔方陣が書いてある。それに魔力を流し込む」

ウィルは書類を見たまま言った。

「そこに座つて練習している。もうすぐ終わる」

ウィルに言われた通り、ソファーに座つて本を開いてみる。

この世界の文字は大体頭の中で変換されるため、本を読むことは造作も無い。

「<緋玉の魔方陣>…」

とりあえず、魔力をな流しこんでみる。

「……………」

一瞬魔方陣が光ったが、すぐに消えてしまった。

「何で…」

「魔方陣に均等に魔力を注ぐのです。一定の魔力を保ちながら魔方陣の隅々まで平らになるように流すイメージで」

シルフがコツを教えてくれる。

「……っあ」

先ほどよりも光った時間は長かったが、またすぐに消えてしまう。

「はぁ…」

練習あるのみ！と着合いをいれて再び挑戦しにかかった。

「リン、そろそろ」

「も…ちよ…」

不思議と眠気が襲ってくる。

これはいつもの副作用ではない。

「だが、初めて魔力を使うんだ。そろそろ疲れているはずだ」

「だって…、ま…だ」

最初より魔方陣が光るようになり、魔方陣から緋色の光の玉が出てきた。

だが、それも少しの間だけだった。

「……………」

「…っわ！」

気がついたらベットの上だった。

どうやらウィルが転移したらしい。

「やりすぎはよくない。あまり頑張るな。俺が退屈だ」

耳元で囁かれ、深いキスをされる。

「…っん！…っい…っはあ…っ」

息が苦しくなってきた頃、ウィルがそつと名残惜しそうに唇を離れた。

「……………頼むから無茶はしないでくれ。あまり無茶をすると体を壊す……………」

もう一度チュツとフレンチキスされ、まぶたの上に手を置かれる。

「寝ろ、明日副作用で一日中寝ることになったら、俺が堪える」

何でウィルが堪えるのだろうか…？…？と思いつつも、先ほどから襲っ

てくる眠気には勝てなかった。

リンの声を聞いて笑顔を見ないと言いようのない喪失感に襲われる
…。

魔力を使うと疲れるのです(後書き)

なんかチューで終わるの多い気が…

ウィルの生誕祭

「アラーナ、何かあるの？」

今日は城も町も随分と騒がしい。

「はい。ウィルフレッド様の誕生日が5日後に迫っていることもあり、本日より学園は休校、5日かけての祭りがあるのです」

「ウィルの誕生日!?!」

「ウィル、城下で買い物に出たいんだけど…。いい？」

「…何か欲しい物があるのなら言え」

「自分で見て買いたいのに！」

「……………付いて「ダメ！アラーナとサラさんとルシアと女の子同士の買い物をしたいの!」…はあ、わかった」

誕生日など、全くもって口にしなかったウィルのせいでプレゼントを買い損ねるところだったリンは、城下でプレゼントを探そうと考えていた。

何かあったらどうするんだと言われると何も言えないので、ルシア

に付いてきてもらうことにしたのだ。

そうしたら、傍にいたサラさんも一緒に行くと言い出し、結局4人で一緒にプレゼントを買いに行くことになったのだった。

「ありがとうございます、ウィル。じゃあ行って来ます！」

そう言って部屋を飛び出した。

城下はとても賑やかだった。

「そういえば、リンちゃんは初めての城下よね？」

言われてみればそうである。

城から出たのは学園に行くときだけで、その登校でさえもウィルとの転移魔法であるから、ほとんど外に出たことはない。

「あまりうるちよろするな。祭りに乗じて危ない輩も潜んでいる」

まあ、これだけの人がいれば、潜むことも簡単だろう。

「お嬢さん達、お一ついかが？」

帽子を被った男が、きれいな花を取り出す。

「魔力を込めるだけでこの花がどんな花の種であろうと作ってくれます」

「すごいよね！いくら？」

「一輪850イディです」

「なら、4輪くださいな」

サラさんはさっそく目的から脱線していた。

「はあ、お母様、早く買い物をすまさないといけないのです。ウイ
ルから与えられた時間は日が高く登りきるまでなのでですから」

そう言っつて、ルシアがサラさんを連れてくる。

「そうだった！リンちゃんは何かあげるもの決まってる？」

「いいえ。見て決めようと思って」

「それなら普段身に付けられる物にしたらいいわ。どうせなら、ペ
アにしたらどう？きつとウィル君喜ぶわ」

サラさんの助言に従い、アクセサリーを買うことに決めた。

「どれがいいかな……」

「そうですね、腕輪は執務の邪魔になってしまいますし、ネックレス
はリン様がチヨーカーをされていますから……」

「どうせなら付けているのが分かるものがいいわよね」

「あ、これ」

目に止まったのはウィルの瞳と同じ色をした青いピアス。

「それはこちらのピアスと対になっているのでございます。一品物で、王のマリンブルーの瞳と同じ色でつくられ、対のピアスは、王妃が月のような透き通った瞳をしていると言う証言から作られたものです」

皆、瞳の色は青と金だが、それぞれ個性があり、濃淡や色が少しずつ違っている。

ウィルは透き通ったマリンブルーだが、父のウィリアムはダークブルーの瞳である。

「私これにします」

アラーナに会計を頼む。

「よかったわね、リンちゃん」

サラさんはニコリと笑い、次行くわよ！と言ってリンの手を引いた。

「目ぼしい物は買えたか？」

夜、ベットの中でウィルが聞いてくる。

「うん」

「…何を買ったんだ？」

普段あまり物をねだらないリンが、わがママを言ってわざわざ城下に買いに行ったものが気になってしょうがないらしい。
リンはふふっと笑う。

「内緒。そのうちわかるよ」

まだ舞い上がる心が落ち着かない。
そう言っただけ今日は自分からキスをした。

「っ！リン、あまり俺を煽るな」

今度はウィルにキスされる。

「…愛してる」

5日後、ウィルはどんな顔をしてピアスを受け取ってくれるだろうか…？

五大王国の王

あつと言つ間に5日経ち、今日は城で貴族を招いてのパーティーがある。

それは、私の初お披露目会でもあつた。

「リン様もウィルフレッド様もお顔を隠してもらつことになっております」

水色のドレス、召喚獣のチョーカー、頭には顔の隠れるベールを身に付ける。

「いつウィルフレッド様にプレゼントを？」

「パーティーが終わってから、二人になったときに…」

頬を染めて言うリンに、アラーナはクスリと笑つた。

「きつとウィルフレッド様に喜んでいただけますわ」

アラーナがドレスの裾を整えながら言った。

「うん。そうだと嬉しいな」

ウィルの喜ぶ顔を浮かべて微笑した。

ウィルと合流する部屋に向つと、そこには既にウィルが座っていた。

「……っ！綺麗……だ」

ウィルはそう言つとこちらに歩いてきて、リンの顔を隠すベールを上げ、キスをする。

「行くか」

「うん」

そう言つて会場に向つた。

ウィルのエスコートで会場に入ると、ざわついていた会場がシンと静まり返る。

「今日は我が生誕パーティーにお越しいただき、誠に嬉しく思う。このパーティーを機に、我が運命人を紹介しようと思う」

ウィルがそう言つと、リンに一齐に視線が集まる。

「リン・シノミヤです」

それだけ言つて後ろに下がる。

ウィルには名前を言つたら下がれと言われていた。

「皆、パーティーを楽しんでくれ」

ウィルがそう言うと、皆一斉に会話を再会し、元のざわつきが戻った。

「今日は他国の王と王妃も来ている。挨拶回りに行かないと行かなければならないが、大丈夫か？」

パーティーに慣れていないリンを気遣ってくれての言葉だった。

「大丈夫。いつかはこういうことに慣れないといけないし、何事も経験だから」

ウィルの手に自分の手を重ね、人の群れの中に入っていった。

「やあ、ウィルフレッド。連れの入学式以来だな」

濃い紫色の髪の毛、覆面をした男の人が話しかけてきた。

「シリル、来てくれたのか」

二人とも握手を交わす。

「初めまして、私はシリル・レヴァイン。レヴァイン王国の王だ。隣は私の運命人のアイリーンだ」

「アイリーン!？」

「もしかして…リンさん？」

シ ril さんの隣に金髪の美女がいるな、とは思ったが、まさかアイリーンだとは…。

「なんだ、友達だったのかアイリーン」

「はい」

まさかこんなところでよく知った友達と会うことになるうとは思わなかった。

「リンがいつも世話になっている。俺はウィルフレッドだ」

「初めまして。アイリーンです。こちらこそリンさんにはお世話になっております」

「こんなところにいたのか、ウィルフレッド、シ ril 」

三人の男の人がこちらに向ってくる。

リンたちから周りが遠ざかって行った。

「初めまして、リンさん、アイリーンさん。私はバルド・カーライル。カーライル王国の王です」

バルドさんは水色の髪で、いかにも優男。

「俺はファウスト・アロイス。アロイス王国の王だ。」

右目に傷があつて、ヤのつく怖い人っぽいファウストさん。

「俺はマルク・リウォール！リウォール王国の王。よろしくな」

熱血と言う感じのマルクさん。

「リンです」

「アイリーンです」

二人で挨拶をする。

「リンさん、アイリーン。二人で食事を楽しんでおいで」

正直、この五大王国の王たちの存在感に圧倒されていたため、シリアルさんの言葉に従った。

「リン、パーティーが終わったら話がある」

離れ際にウィルがそう耳打ちした。

五大王国の王（後書き）

今回ラブ少なっ！

次回ラブラブさせます！

祭りの後の幸せな夜

アイリーンと護衛に来てくれたルシアと長い間挨拶をしたり、話している、いつのまにかパーティーはお開きになったようで、ウィルとシリルさんが迎えに来た。

「リンちゃん、また学園でね」

アイリーンとその場で離れ、リンもウィルと共に私室に戻る。

部屋に戻ったリンとウィルはお酒の入ったボトルを持って、バルコニーに出た。

生誕祭の名残はまだ続いているようで、町はざわざわと夜の雰囲気醸し出していた。

「ウィル、お疲れ様」

ウィルのグラスにお酒を注ぐ。

「ああ。リンも」

「あ、私は未成年だから…」

「未成年？」

あれ？この世界に未成年はないのかしら？

「向こうの世界ではお酒は20歳になるまで飲んじゃだめなの」

「そうなのか……。…だが、ここはフォンテーンだ。リンも飲める」

「え……。まあ、うん」

上手く丸め込まれ、お酒を手渡される。

「…そういえばウィルっていくつ？今日が誕生日ってことは、私が召喚されたときに誕生日じゃなかったってことだよね？」

「…俺が20の誕生日の時は、色々あって俺の周りが整っていなかったからな。下手にリンを召喚して、守りきることができるとは言えない状況だった。この世界では20のうちに召喚の儀を行わなければならぬ。だからあんな中途半端な時期だった」

ウィルはお酒を口に含む。

「そうなんだ…」

リンもお酒を口に含んだ。強いアルコールの香りにくらくらってきたが、凄くおいしかった。

「リン…」

「ん？」

呼ばれたかと思うと、ウィルの顔が目の前にあった。そして、右手の薬指に冷たい感触。

「…」

「本当は一年後の誕生日に婚礼の儀の申し込みをするのが普通なんだ…。だが、俺の都合でリンを召喚するのが遅くなってしまった。一緒にいた時間はたったの三ヶ月だが、俺に一生付いてきてくれな
いか？」

え！？えええ！？これってプロポーズ！？

「な…んで。だって私たちも…」

「異世界からの運命人は、リンのように身を守る術を持っていないこともある。一年間、学園に通って防御の術を学んでから婚礼の儀をするのが普通だ。それに、たとえ運命の人であっても、すぐには受け入れられない。万が一、相手が嫌だった場合を考えて、一年後に婚礼の儀の申し込みをする」

「指輪は…」

この世界では既婚者が指輪をつけるという習慣は無いはずだ。

「婚礼の証は異世界人の方に合わせられる。俺の母上はたぶんリンと同じ世界から来たんじゃないかと言っていた。だから、婚礼の儀のことは母上に聞いた。それで…」

だから指輪を…。

確かに、サラさんは左手に指輪をしている。

「なんで右指？」

「婚礼の儀の時に左指につける。俺もリンが学園を卒業するまで婚

礼の儀をするつもりはない。予約の証と、リンが俺に付いてきてくれるという証になる」

微笑まれながら言われた言葉に顔が熱くなる。

こつんとおでこがぶつかり、ウィルの顔が間近にくる。

「リン、大切にする。たった三ヶ月だったが、俺にはもうリンじゃなければだめだとわかった。ずっと一緒に、死ぬまで一緒にいたい。俺と一生一緒にいてくれないか？」

ウィル以外の人が隣にいるのを考えられるかと問われれば、答はN Oである。

「はい…」

そう言った瞬間に唇を塞がれ、強く抱きしめられる。

「何があっても絶対に離さない」

「あ、ウィル。ちょっといい？」

ウィルからのキス攻撃を一度止めさせる。

「これ」

部屋に入り取ってきたのは、5日前に買ってきたペアのピアス。

「お誕生日おめでとう、ウィル」

ウィルの前にピアスを出す。

「この二つのピアス対になってるんだよ。ウィルの瞳と私の瞳の色」

「俺はこっちがいい」

ウィルが取ったのはリンの瞳の色。

「リンの瞳の色を付けていたい」

「う、うん、いいよ。じゃあ、私はウィルの瞳だね」

赤くなった顔に気づいていないフリをしながら、両耳に青いピアスを付ける。

「なんか…、ウィルと一緒にになったみたいでドキドキする……っ
」!

いきなり横抱きされ、ベッドに押し倒される。

見えたのはベッドの天蓋と、ウィル。

ウィルの両耳には、リンの瞳と同じ色のピアス。

「リン。もう我慢できない。リンの全てを俺に取れないか？」

「っ！え！？…っん」

返答も無しに、口付けをされた。

「…優しくする」

もう、羞恥でうなずくことしかできない。

ウィルはふっと笑って事を進めた。

今までで一番幸せな夜。

祭りの後の幸せな夜（後書き）

長くなってしまった…。

転移先の不幸

朝起きると、ウィルの腕に包まれていた。

「起きたか…」

ふっと笑い、リンにキスするウィル。

二人とも裸で、お互いの熱が直に伝わり、リンは顔を赤く染める。

「お…はよ」

「ああ」

ウィルはもう一度キスすると、上半身を起こし、布団から出て仕事の仕度を始めた。

ふとこちらを見る。

「辛くないか？」

下半身が少し痛い、立てないほどではない。

「大丈夫」

「そうか、よかった。…次は立てなくなるまで愛してやる」

耳元で囁いて洗面所に消えるウィル。

顔を真っ赤にしながら布団に埋まるが、アラリーナが来るかもしれないと思い、床に放り出されている服をすばやく着る。

「おはようございます」

タイミングよくノックをして入ってきたアラリーナ。

アラリーナは、顔が真っ赤のリンに微笑み、朝食の準備を始めた。

今日から学園も再開する。

今日の授業は文字を学ぶ。

いくら、言葉が通じると言っても、読み書きができなくては不便であるからだ。

「リンちゃん、昨晚何かいいことでもありました？」

昨晚で、アイリーのリンの呼び方がリンさんからリンちゃんに昇格した。

顔がにやけていたのだろうか、アイリーが微笑みながら聞いてきた。

「え？あ、うん」

昨日のことをまた思い出し、顔が赤くなると同時に、勝手ににやける。

「幸せそうだなによりです」

そう言うてにつこり笑うアイリーン。
きつとこの二人の周りには、ピンクのオーラが発せられているだろ
う。

右手の指輪を見て、再び微笑んだ。

魔方陣相手にヌンヌンと魔力を注ぐアイリーン。
だが、うまくいかないようで、アイリーンは脱力した。

「難しいです。リンちゃんはできました？」

「今転移の魔方陣をやってるんだ」

魔方陣は、各々のペースで練習することになっている。

あれから、リンは大分力を扱えるようになり、魔方陣を使うのなら、ほとんどの防御魔法はマスターしたことになる。

「すごいです…。私なんてまだ盾の魔方陣で…。魔方陣無し魔法なんてずつとずつと後です…」

魔方陣を扱えるようになったら、魔法陣なしで魔法を使えるようにならない。

「向き不向きがあるからね。もしかしたらアイリーンは魔方陣なしのほうに向いてるのかもしれないでしょ？」

「そう…かな…」

二人は再び魔方陣に魔力を注ぎ始める。

リンの魔方陣は転移の魔方陣なので、足からの魔力の放出が必要となる。

「転移する場所は学園の中庭」

中庭に行つて、戻ってくることを繰り返す練習。
これが中々難しい。

魔力を魔方陣に注ぎ、リンは光に包まれた。

「あれ？」

着いた先は中庭…ではなかった。

「あ、あ？」

不良の溜まり場屋上。

ピンチの時の召喚獣

やばいですーマジやばいですー！

ダラダラと冷や汗が流れる。

「こゝ、こんにちはあ」

とりあえずニツコリ笑ってみる。

「てめえ誰だ…」

ひい！お怒りでございます！

「間違えて転移してしまいました…」

口を無理やり引き上げながら答える。

「…てことはてめえ…異世界人が…」

男の声のトーンが低くなった。

異世界人だったら何か悪いのでしょうか…！？

男の手が伸びてくる。

「ひっ！」

思わず目を瞑った。

「……………ぐあああああ！！？」

男の凶太い悲鳴に目を開ける。

「豹くん！？」

そこにはリンの召喚獣の黒豹がいた。

黒豹は強かった。

自ら魔方陣を出し、攻撃してくる男達を薙ぎ払っていく。

「わっ！」

粗方片付いたのをボーと見ていたリンに飛びついてきたと思ったら、次の瞬間には中庭に場所が変わっていた。

「え？」

突然のことに目を瞬かせていると、頬にざらりとした感触。

見ると、黒豹が怪我はないかと言う風に関心そうに周囲を漂わせてリンの頬を舐めていた。

「あ、ありがとう、豹くん」

そう言うと、黒豹はリンの腕に首を通して擦り寄ってきた。

「そついえば…名前決めてなかった」

いい加減豹くんと呼ぶのは可哀想だろう。

「黒とか…、ブラックとか…普通だな…」

考えるが、出てくるのは黒系の名前ばかり。

「シュヴァルツ…でどうでしょう?」

結局意味は黒だが、カッコいい感じなので気に入ってくれたようだ。シュヴァルツは、リンに擦り寄ってきた。

「シュヴァルツ、今日はありがとう」

そう言うと、もう一回ペロリとリンの頬を一舐めし、消えた。

「そろそろ戻らないと教授が心配する…と言うより怒られる…」

教室に転移しようとして男子トイレに転移してしまったのは内緒だ。

「やっと帰ってきたか。あまりに遅いから今から探すところだった」

今度は無事に教室に転移したら、何やらランバートの周りにクラス

メートが集まっていた。

「学園でリンドグレーンの目撃情報があった。セキュリティ万全なこの学園にどうやって入ったかはわかっていないが、とにかく今日は解散だ。身柄受取人には既に連絡してある」

リンドグレーンの名に身が震えた。

「リンちゃん大丈夫ですか？」

リンの青い顔を見て、アイリーンが声をかける。

「大丈夫」

言いながらも、リンは早くこの学園がっこうから離れたかった。

ウィル、ウィル、早く来て…！

ピンチの時の召喚獣（後書き）

ウィル様が出ていない…だと…！

魔病を患いました

…なんかふわふわする…。
何だろう…。

「……………っ！……………んっ！……………リンっ！」

ゆるゆるとまぶたを上げると、そこには焦った顔のウィルがいた。

まわりは暗い。

まだ夜中だろう。

「凄い汗だ…、熱も高い」

ぼんやりとした水桜織の額に手を当てるウィル。

「リンドグレーンの事もあるからな…。疲労が熱となってでたのか…？」

生憎、ウィルには医学の知識がない。

ウィルは上着を着て部屋を出て行った。

「はぁ…っ…」

昨日強制的に帰宅させられた後もリンの震えは止まらなかった。

リンドグレーンの名前を聞くだけで気分が悪くなったが、近くにいてもかもしれないと思うと、緊張と寒気に押しつぶされそうになった。

「うい…る…」

夜ウィルに包まれても寝ることは儘ならず、かなりウィルに迷惑をかけてしまった。

「リン様！お加減はっ…！？」

ウィルはアラーナを呼びに行ったらしい。

アラーナが血相を変えてリンに駆け寄った。

「まあ！凄い熱！すみませんウィルフレッド様、ルシア様を呼んできてもらえませんか？」

「ああ」

ウィルは再び部屋を出て行った。

「リン様、安心してください。ルシア様はこの城の医師でもあるのです。すぐに楽になります」

アラーナは魔法で出した濡れタオルでリンの汗を拭きながら言った。

「大丈夫か、リン」

ルシアが部屋に入ってきてリンの額に手を当て、次に肺の上らへんにも手を当てる。

「これは…、魔病だな。恐らくリンドグレンに対する負の感情に付け入ったのだろう…。こんな複雑な魔病をばら撒く奴はリンドグレンしかない。普通の薬では治せない。今から魔草を探す。この魔病の薬は珍しいシユラビータの花びらを使わなければならない。少し時間がかかるかもしれない…」

「シユラビータ…難しいな…」

シユラビータは希少な花で、フォンテーン王国とレヴァイン王国の国境付近に生息している花だ。

「見つかるまではなるべく眠るしかない。眠り薬を調合するからそれを飲ませて寝かし続ける」

そう言ってルシアは足早に部屋を出て行った。

シユラビータという花は本当に少ない。見つけたら幸せになれるという程見ることが少ない。

実際、ウィルも見たことは一度も無い。

「厄介なものを…」

今度会ったら必ず殺すと心に決め、リンの熱で赤い頬を撫でる。

「ああ！」

アラリーナがいきなり声を上げた。

「す、すみません、突然大きな声を出してっ！でももしかしたらリ

ン様を助けることができるかもしれないんです！」

そう言ってアラリーナは部屋を飛び出した。

「これはっ！そうか！でかしたぞ、アラリーナ！それなら私も今すぐ転送する」

アラリーナが持ってきたのは一輪の花。

それは先日、サラがウィルの生誕祭の際に購入した何の花の種でも作ってくれる花、カルシフという花であった。

「種だが、時限操作の魔術を使えば早く咲くだろう。ちょうど私もウィルもそしてお母様も時限操作の魔術を扱える少ない魔術師の一人だ。私からお父様とお母様に説明しよう」

それから早急に話がまとまり、ウィリアムが臨時で執務をし、ウィルとルシアと、カルシフを同じく使わずに所持していたサラがカルシフからシュラビータの種を作ることに専念することになった。

リンはルシアの薬によって眠りにについている。

ウィルはリンに口付けをし、部屋に強力な結界を張って、ルシアの研究室へと急いだ。

待ってろ、リン……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8973w/>

王様に召喚されました

2011年10月13日17時50分発行